

「明日まで出してください」？——動詞表現のアスペクト

- (1) 「この書類はいつまでに出せばいいですか」「明日まで出してください」

山形に赴任した知人は、初めの頃こんなやりとりで違和感を持ったそうです。山形・仙台方面では、共通語で「…までに」と言うときに、このように「…まで」という言い方をすることがあります。共通語では「…まで」と「…までに」は区別され、各々次のように用いられます：

- (2) 6時まで待つ、駅まで歩く、朝まで討論する、紐が切れるまで靴を履く

- (3) 6時までに着く、夕方までに帰る、来週月曜までにレポートを書く、客が来るまでに部屋を片づける

これらの例を見ると、「…まで」と「…までに」は使い方が明らかに違うという印象を受けますが、この二つには似ている点もあります。両者の共通点と相違点を挙げると次のようになります：

- (4) 共通点：「…まで」と「…までに」は、ともに事態の「限界／限界点」を表す

- (5) 相違点：「…まで」は＜継続的＞な事態に関して用いられ、事態の＜継続＞の限界を表すが、
「…までに」は何らかの＜到達＞を含む＜非継続的＞な事態に関して用いられ、
事態に含まれる＜到達点＞の限界を表す

「待つ」「歩く」「討論する」「靴を履く」等の事態は、その事態を続けようと思えば(事情の許す限り)際限なく続けることが可能——すなわち、＜継続的＞——ですが、「着く」「帰る」「レポートを書く」「部屋を片づける」等の事態は、それ自体が＜到着／到達＞そのものを表す＜瞬時的＞なものであるか、あるいは時間的な広がりはあるものの広がりには際限のないものではなく、その事態に内在する一定の＜到達点＞に達したらそれで終了になるものです。

上で見た「待つ」「歩く」「討論する」「靴を履く」および「着く」「帰る」「レポートを書く」「部屋を片づける」などの動詞表現は種々の面からその意味を分析することができますが、そのような意味的側面のうち、その動詞表現が表す事態の時間的構成の捉え方に関するもののことをその動詞表現の**アスペクト(aspect)**と呼びます。その動詞表現が表す事態の捉え方として、それが＜継続的＞か＜非継続的＞か、＜瞬時的＞かどうか、＜到着／到達＞そのものを表すものかあるいは＜到達点＞を内に含むものか等の意味は、その動詞表現のアスペクトに関するものということになります。

英語でもアスペクトは動詞表現の重要な意味的側面の一つです。英語では、アスペクトは一般に、「語彙動詞とその従属要素によって表されるもの(語彙アスペクト(lexical aspect))」と「進行形(progressive)・完了形(perfect)等の文法的手段によって表されるもの(文法アスペクト(grammatical aspect))」に大別されます(前者は「状況アスペクト(situation aspect)」「アクションスアルト(Aktionsart)」等の名で呼ばれることもある。cf. Aarts 2011: 273)。このうち前者の語彙アスペクトに関しては種々の分類が提案されていますが、その中で有名なものとして Vendler(1967)の分類があります。Vendler は語彙動詞とその従属要素が表す事態の時間的構成のあり方に着目して、次の4分類を提示しています：

- (6) states (状態)：love, believe, know, be happy, have a brother, live in a house, etc.

- (7) activities (活動)：walk, run, swim, push a cart, stay at a hotel, etc.

- (8) accomplishments (完遂)：walk to the station, run a mile, write a letter, build a house, etc.

- (9) achievements (達成)：arrive at the station, reach the top, win the race, find an object, die, etc.

これらのうち、states と activities は事態が＜継続的＞という点で共通していますが、後者は(意識の上で)事態が比較的明確な＜端点＞(すなわち、＜始め＞と＜終わり＞)を持つと見なされるのが特徴です(たとえば、‘love’であれば、いつから始まっていつ終わるのかが意識の中で明確ではありませんが、‘walk’ならば、ある時点で始めて(それを続けようと思えば際限なく続けることができるかもしれないけれども)いつかは終わるという意識があります。accomplishments と achievements はその事態が＜到達点＞の概念に関係するものであるという点では同じですが、前者が＜到達点＞を内在する時間的広がりのある事態を表すのに対して後者は＜到達点＞それ自体を表すという違いがあります(たとえば、‘walk to the station’は「一定時間かかって駅まで歩いていく」というプロセスの後に「駅に到着する」という＜到達点＞があるわけですが、‘arrive at the station’の場合は初めから「駅に到着する」という＜到達点＞そのものを表すわけです)。

このような動詞表現の語彙アスペクトの分類は、進行形や完了形などの文法アスペクトとも深い関わりを持っています。たとえば上の4分類のうち、states はその事態が現在の時点において存在する場合、「単純現在形(simple present)」を用いて表すことができますが、他の3つは通常それができず、その事態と現在の時点とを結びつけるには(習慣・出来事現在・遂行文などの場合を除いて(cf. Leech 2004: Chap. 1))「現在進行形(present progressive)」を用いる必要があります。さらに、states は「現在完了形(present perfect)」で用いられると＜状態の継続＞を表しますが、他の3つは通常はその意味を表すことができません(そのような意味を表すのには、通常「現在完了進行形(present perfect progressive)」が用いられます)。動詞表現のアスペクトは、テンス(tense)・ムード(mood)・モダリティ(modality)などと同様、英語の動詞の文法・意味の体系の骨格をなしています。